

日本の学童ほいく

みんなで読もう
目標
3万8000部

全国学童保育連絡協議会

普及拡大 ニュース

2021年10月8日

子どもを学童保育に通わせる保護者と、子どもたちといっしょに毎日過ごしている指導員が書き手となり、働きながらの子育てを応援し、学童保育の充実の願いをこめてつくられている月刊誌です。みんなで読んで、語って、楽しみながら、よりよい学童保育をつくっていきましょう。

元気が出る
みんなの取り組みを
ご紹介

地域での普及拡大の取り組み

ほいく誌を読む会「カフェHOIKUSHIござ〜れ」で共感や気づきに楽しむ！

山形県では6月から「ほいく誌を読む会」が復活しました。

会の名前は「カフェHOIKUSHIござ〜れ」。「ござ〜れ」は、方言で「来てね」を意味する「ござれ」からきています。たくさんの人に来てほしいという願いを込めました。

いまは月1回、平日の10時からお昼頃まで行って主に指導員が参加しています。読み合わせや心に残った内容を話していると、それぞれの視点や感想に、「そうそう」という共感や「なるほど〜」という気づきがあって、楽しいです。

今後は、定例化や指導員以外の読者が参加できる機会をつくりたいと考えています。

山形
の
取り組み

「学童保育をよくするために」を合い言葉に取り組む「ほいく誌」の普及拡大！

大阪府では『日本の学童ほいく』の普及活動として、年3回の交流会を開催しています。学保協役員会でも「がくほチーム」を結成し「学童保育をよくするために」を合い言葉に活動をしています。

6月号の講座「生理の貧困」をテーマに交流した際は、初潮を迎える子どもたちが通う学童保育に必要な配慮（トイレに生理用品を設置してあるか、子どもたちが困ったときに対応できる環境づくりがされているかなど）について考えあいました。

自分を客観視できるようになってくる反面、心の葛藤や不安も増える時期。保護者と指導員でこの時期の子ども理解を深めるきっかけや、本の内容とそれに基づいた実践や気づきを伝えることを大切にしています。

大阪
の
取り組み

日本の学童ほいく 10月号

特集 学童保育の施策 —— 現状と課題

今回の特集では、国の学童保育施策の課題、各地域の学童保育施策の実際と課題を学ぶとともに、学童保育連絡協議会の取り組みを交流することを通じて、「今後の取り組みの課題」「学童保育の施策をより充実したものにするうえで大切にしたいこと」を考えあいます。



日本の学童ほいく

みんなで読もう目標 3万8000部

子どもを学童保育に通わせる保護者と、子どもたちといっしょに毎日過ごしている指導員が書き手となり、働きながらの子育てを応援し、学童保育の充実の願いをこめてつくられている月刊誌です。

普及拡大 ニュース

2021年10月8日

読者の声

石川県津幡町 ● 保護者から

2021年2月号の特集「全国学童保育研究集会—これまでの歩み」を読みました。「新型コロナウイルス感染症」の影響で、2020年の全国研が中止になり、本当に残念でした。松崎運之助先生の記念講演「幸せになるための学童保育」にまとめられていた体験談がとてもすばらしく、このような講演を毎年聞けるのは貴重なことだと思いました。また、私の子どもが通っている学童保育では、毎年のように指導員さんが保護者会で全国研の様子を報告してくれていて、その場面を思い出しました。参加した指導員さんは、その年の全国研で見てきたもの、勉強になったこと、教えてもらった遊びのことなど、目をキラキラさせながら報告してくれました。「とてもよい研究集会なのだろうな」といつも想像していたので、2021年度は、できることなら開催されてほしいです。また、指導員さんからの報告を保護者会で聞けることを祈ります。
（『日本の学童ほいく』2021年8月号「読者のひろば」より）

奈良県生駒市 ● 保護者から

2021年2月号の特集「全国学童保育研究集会—これまでの歩み」に掲載されていた、全国学童保育研究集会の一覧で、第1回が1964年と知ってびっくり。私が生まれる前から学童保育の研究集会があったなんて、想像もしていませんでした。東京で30数人で開催された第1回の研究集会。いまからすればとても小さな集会かもしれませんが、なんとも力強い軌跡です。この頃、東京都ではすでに学童保育に公的な補助金が出されていたというくらいですから、この時代、学童保育を必要とする保護者が一生懸命、行政にも働きかけていらしたのだろうと想像します。我々いまの世代は、すでにあるものを楽しみ、自ら働きかけたり動いたりすることに、どこか億劫さを感じ、「なんで忙しい私たちがそんなことまで……？」という思いが湧いてしまうことがあるかもしれません。学童保育にかぎらずなんでも、設立したときの当事者と、それがあたりまえのようにになっている時代の利用者として、温度差が生じるのは必至。けれど、自分が働きつづけながら、同時に、子どもが過ごし、育つ場所を豊かに維持していきたいと思う気持ちが、少しずつでも当事者意識につながればいいなあと思うこともあります。少なくとも私は、ただ放課後を過ごす場所ができたという以上に、遊びや生活の場のなかでたくさんのことを育んでもらっている、と思っています。本当に少しのことしかできてはいませんが、他人事ではなく自分事として、学童保育を考えるようにしていきたいなあと思います。余談ですが、研究集会の記念講演者には、軒並み著名な方々のお名前が並んでいてそれもびっくりしました。どんなお話をされたのか興味津々です。
（『日本の学童ほいく』2021年7月号「読者のひろば」より）

『日本の学童ほいく』との出会いは、学童保育の指導員になった時、学童保育のことを学ぶには、行政研修、指導員学校、研究集会と『日本の学童ほいく』しかないと教えてもらったことでした。学童保育を知らずに指導員になった私にとっては、貴重な学びのツールの1つでした。また、指導員として仕事をするだけでは、学童保育の環境が整わないことも知り、保護者会や連絡協議会の役割を理解することにもつながりました。数年前には縁あって、編集委員をする機会をいただきました。特集企画の検討をする際に、テーマ毎に自身の保育内容を振り返る作業をすること、テーマに沿って何を大切にしていこうかが必要かということを考えることで、学童保育の生活内容を客観的に整理することができました。今も特集企画で伝えたいことは何かを考えながら読むことが習慣となっています。特集企画のテーマは、現在、大事にしたいことが選ばれています。日常の慌ただしさの中、全てのテーマについて考えることは難しいですが、特集企画について考え、幅広い視野で生活内容を捉えるきっかけになっています。『日本の学童ほいく』を共通のテーマに指導員と保護者が語り合う機会が増えることを願っています。

私と「ほいく誌」

全国連絡協議会リレー執筆・
今月は大阪府の川崎みゆきさん